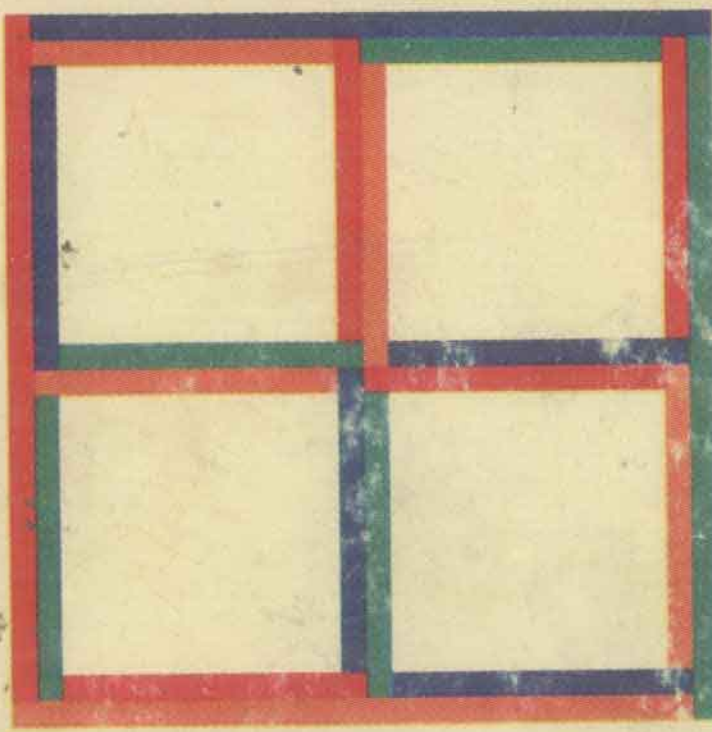




# 知的生活の方法



知的生活とは、頭の回転を活発にし、

オリジナルな発想を楽しむ生活である。

日常生活のさわがしさのなかで、自分の時間をつくり、

データを整理し、それをオリジナルな発想に

結びつけてゆくには、どんな方法が可能か？

読書の技術、カードの使い方、書斎の整え方、散歩の効用、

通勤時間の利用法、ワインの飲み方、そして結婚生活……。

本書には、平均的日本人に実現可能な、

さまざまなヒントとアイデアが、著者自身の

体験を通して、ふんだんに示されている。

知的生活とは、なによりも内面の充実を求める生活なのである。

# 知的生活の方法

昭和五一年四月二〇日第一刷発行 昭和五一年八月一〇日第七刷発行

著者——渡部昇一

© Shoichi Watanabe 1976 Printed in Japan



発行者——野間省一 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号二三 電話〇三―九五―二二 振替東京八―三九三〇

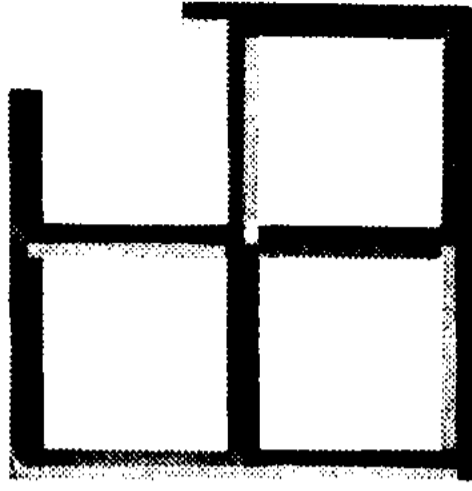
装幀者——杉浦康平十海保透

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

●——定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はおとりかえします(学1)

渡部昇一



町生活の方法

講談社現代新書



## はじめに

「知的生活」という言葉はあまり用いられないし、またキザに聞こえるかも知れない。しかし高校進学者が百パーセントに近く、大学進学者すらも、近い将来において五十パーセントまでいくのではないかといわれる現代の日本では、知的生活者の数は驚くほど多くなってきている。にもかかわらず、知的生活という言葉があまり用いられないのは、それが「労働」の反対であり、「有閑階級」に結びついているようなニュアンスがあるからではないだろうか。

しかしこれは、まったくの誤解である。マルクスが『資本論』を書けたのは、大英博物館における彼の知的生活のおかげである。英国労働党主で首相であったウイルソンは、オクスフォードの先生であった。知的生活の価値はイデオロギーと関係なく、人間としての価値である。それに今では、昔は単純肉体労働に属するとされた分野でも、相当の知的生活の要因が加わってきているのである。

この本で私が意図したことは、本を読んだり物を書いたりする時間が生活の中に大きな比重を占める人たちに、いくらからでも参考になることをのべることであった。私は、読書論とか学

者の伝記とかを読むのが好きである。そして「なるほど」と思われたことは自分でも真似してみた。真似してよかったものもあるし、真似しきれなかったものもある。また自分で工夫してみてもよかったこともあるし駄目だったものもある。そんなことを体験に即してのべてみたいと思った。したがって、本書に書いてあることは、すべて私の実感か体験か願望かである。

何かにつけて「私」を尺度としているから、違った分野の人にはあまり適用できないかも知れない。たとえば実験物理とか、フィールド・ワークの多い人類学とかでは、別の方法で補う必要があるであろう。しかし、多くの人にとっては、書物がフィールドである。またフィールドや実験に多く時間を使う人も、論文を書く時間もあるわけだし、また、もっと広い読書をやる時間があるはずである。

また、私が男であるところから、女性の立場は考慮していない。知的生活には男女の性別のない共通の面があると思うが、また具体的には相当違ってくる面があるのではないだろうか。男である私が、なまじっか女性の立場にもなってみるよりは、男の立場から書いた方が、女性に対して何かえて参考になると思った。知的生活をこころぎす女性のために、女性の方が書いたものがあったてもよいであろう。要するに私は、自分が実感したり体験したりしなかったことは書かないことにしたのである。

知的生活についての本が、現代の読者のためにも必要なのではないか、と思ったのは、二十

年以前に読んだハマトンの『知的<sup>インテレクチュアル・ライフ</sup>生活』を数年前に読みかえし、去年と今年また読みかえして非常な啓発を受けたからである。上智大学の若い同僚たちや、大学院の学生たちにもすすめたところ、この人たちも非常な感銘を受けたようであった。確かに知的生活に対する具体的なアドヴァイスが現代でも求められているのである。

もちろんハマトンのものは大部のものであるし、ヴィクトリア朝のイギリス人を相手にしたものであるから、われわれとは縁遠い話もある。しかし彼は、自己の体験に即して率直に、また具体的に書いているため、現代でもすこぶる示唆に富むものである。本書はハマトンにくらべれば小さい本ではあるが、彼にならって、私の体験をもとにして率直にまた具体的にのべたつもりである。現代という情報洪水の中にあって、知的生活をこころざされる人々に何らかのお役に立つならば幸せである。

この本のために、いくつかの書齋設計図を提供してくださった青木康氏、またはじめからおわりまで、いろいろ助言してくださった浅川港氏に厚く御礼申しあげる。

一九七六年三月

渡部昇一

## 目次

はじめに ..... 3

1—自分をごまかさない精神 ..... 9

知的正直／『三国志』からシナ文学へ／頼山陽をまねる／縁先の碁盤／「手段としての勉強」の危うさ／恩師にめぐりあう／「わからない」に耐える／漱石体験／「わかった」という実感／巨人、大鵬、卵焼き／英語の小説が読めない／知的オルガスムスを求めて／不全感の解消／老齡はこわくない

2—古典をつくる ..... 49

繰り返えし読む／趣味の形成／漱石と漢文／一つのセンスにコミットする／精読が生み出すもの／『半七捕物帳』／古典とは何か

3—本をかう意味……………69

身銭を切る／読みたいときにとり出せる／カード・システムの問題点／無理をしても本をかう／ギッシングとハイネ／貧乏学生時代／極貧のなかの楽しみ／闇屋になつても本をかう／知的生活を守る気概

4—知的空間と情報整理……………93

彦一の知恵／図書館に住む／能動的知的生活者／蔵書と知的生産の関係／向坂氏の蔵書／『ドイツ参謀本部』裏話／「本がある」という自信／金は時なり／時間を金でかう方法／クレーラーの効用／書齋の音熱対策／図書館を持つ／カード・システム／カード・ボックス／カードの入れかえ／ファイル・ボックス／コピー利用法／卓上ファイル／森銑三先生の方法／書齋の構想／水鳥の足

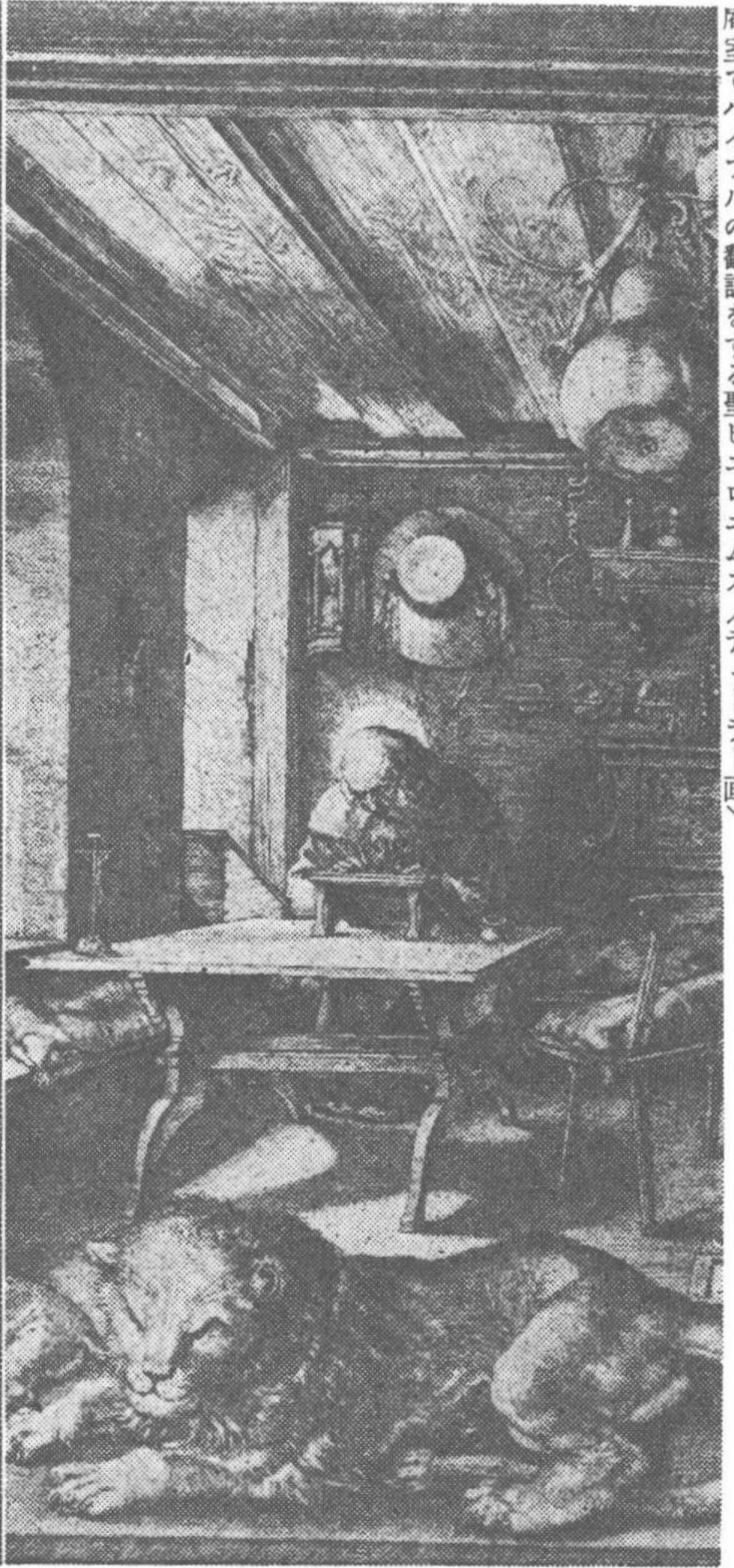
5—知的生活と時間……………155

静かなる持続／タイム・リミット／ハマトンの見切り法／見切り法の活用／早起きカント／ゲートの場合／夜型か朝型か／血圧型／「中断」／溶鉱炉と知的生産／ゲートの城／たっぷり時間をとる／半端な時間の使い方／通勤時間／コウステイング／睡眠と安らぎ

6—知的生活の形而下学……………193

交際を楽しむ／食事について／ビールとワイン／コーヒーについて／牛乳とウイスキー／散歩について／家族／結婚／夫婦の知的生活／知的生活と家庭生活の両立

庵室でバイブルの翻訳をする聖ヒエロニムスヘデューラー画



1 ——— 自分をごまかさない精神

## 知的正直

最後に、最も大切なる訓……己おのれに対して忠実なれ、さすれば夜の昼に継つぐが如ごとく、他人に對しても忠実ならん。(坪内逍遙訳『ハムレット』第一幕第三場より)

これは、シェイクスピアが老ポローニアスの口を通じて語らせている教訓である。息子が旅に出ようとしているときに、この老侍従長は人生の知恵のかたまりみたいなものをつぎからつぎへと並べ立ててゆく。その中には「借手かりてにもなるな貸手かしてにもなるな。借金は儉約の刃鋒を鈍くし、貸金は動やもすればその元金もとを失いまたその友をも失う」などという、たいへん有名な教訓もある。しかし老ポローニアスは、つまりシェイクスピアは、そうしたもろもろの教訓よりも、「己おのれに対して忠実なれ」ということが一番大切なのだ、と教えている。

では「己おのれに対して忠実なれ」ということは、具体的にはどうということなのか。普通に解釈すれば、「良心に恥じないようにせよ」という解釈をしてよいであろう。良心に恥じないことこそはすべての道德の根源であるというのは、陳腐ではあるが真理であろう。しかし私はここでそうした倫理道德的な面よりも、個人の進歩と向上という立場から「己おのれに対して忠実なれ」という言葉を解釈してみたいと思う。

小学校の二年生のころに、近所の子供たちのあいだで大いに将棋が流行したことがある。だがしばらくすると、はっきり二つのグループにわかれてきた。つまり、ぐんぐん強くなった者とそうでない者である。強い弱いといっても、たかが小学生の将棋だからどうということはないのだが、その間の区別は明白であった。

強くなった方の子供たちは二、三人で、あとはみんな強くならなかった。強くなった子供たちの特徴はズルをしないというまことに単純なことなのである。子供のことだから、相手がよそ見をしたり、便所に立ったりするあいだに、端はしの方から槍を取ったり、歩ふをちよろまかしたり、なかなか油断ができない。角道かくみちを少しずらすなどというのもよくやることであった。子供たちの将棋でワイワイさわぐのは、相手のズルを発見したり、それを否定したりするからであった。この連中はけっして強くならなかった。

これに反して、将棋を指しはじめると静かになる子供たちがいた。そういう子供たちは、数は少なかったが、自転車屋のタケシ君とか私がそうであった。この連中はけっしてごまかさないうズルをやらない。ズルをやって勝ったのではおもしろくない、というセンスがあった。そして間もなくわれわれは近所の大人たちの縁台将棋にも加わって、けっこう勝てるようになった。一方、ズルの連中はあいかわらずだ。将棋を覚えたのは同じころだったのに、間もなく私たちはズルの連中とは指さなくなかった。

これは安っぽい道徳教育の材料みたいであるが、少くとも成長期の頭脳にとっては本質的なことであるということが、ますますはっきりしてきたような気がしている。ごまかす、ズルをする、という精神ではじめたものには上達しないものだというのは鉄則であるように思う。私は家庭教師で小学生や幼稚園の子供を教えたことがあるほかに、中学・高校・短大・大学・大学院とたいの種類の学校の教師をしてきたが、この鉄則はゆるがない。ごまかしたりズルするところまではいかなくても、よくわからないのにわかったふりをする子供は進歩がとまるのである。

私は語学が専門なので、こういうことは観察しやすい。英語がそうである。単語の意味がある程度わかっている場合、じっくりと文脈を追わなくても、あてずっぽうで「こんな意味だろう」ということができる。ところがそういうやり方だと、やさしい英文でも意味の解釈が正確にできないのだ。やはり入念に文脈を追う生徒だけが、ちゃんとした理解にいたることができるのである。学校の英語の先生はそのことをよくご存知だから、原則として英会話で英語の点数をつけたがらない。入学試験にも会話を出すことはまずない。簡単なものでもよいから、一度英文和訳の試験をしてその採点をしたことのある教師は、正確な答案と当てずっぽうの答案の差があまりにも大きいのに啞然として、試験は英文和訳に限ると思いきや、会話は、当てずっぽうでもまあまあ通用するからである。

「あてずっぽう」の英文解釈というのは、子供の将棋のズルに相当し、進歩をその時点ですべてしてしまうのではないかと思う。入学試験のむずかしい学校とそうでない学校の違いというのは、「あてずっぽう」がきく学校ときかない学校の違いということになるかも知れない。もちろん、競争が激し過ぎるのは別の弊害を生むので、無条件で入試を支持するわけではないのだが、中学の英語ぐらいから当てずっぽうをやる性格の人は、まず知的生活に適さないとと言えるであろう。英語には「知<sup>インテレクチュアル・オネスティ</sup>的 正直」という言葉がある。知的正直というのは簡単に言えば、わからないのにわかったふりをしない、ということにつきるのである。ほんとうにわかったつもりでいたのに、それがまちが이었다、ということはある。それは当てずっぽうのまちがいは違うから、そういうまちがいはなら、まちがうたびに確実に進歩する。しかし傍<sup>はた</sup>から見ただけでは、あてずっぽうでまちがえたのか、ほんとうにそうだと確信しながらまちがったのか、その辺の区別はつかないのである。その区別がつくのは、自分だけということになる。そこで「己れに対して忠実なれ」という、シェイクスピアの忠告が生きてくるのである。

### 『三国志』からシナ文学へ

これは語学の場合だが、読書についてもほぼそれが当てはまる。おもしろい本は、徹底的に読みこまなければならぬ。私の子供のころの読書は少年講談からはじまって、『三国志』にいた



少年講談『由井正雪』のさし絵

すに所はござらぬ。よ  
第一に切腹致す、各々  
にして頂きた  
坊、お身  
介錯をた  
にも承知  
した」  
用意の大行李の中  
い麻の網を出して、座敷  
上は鴨居、下は間に釘で打ちつけ、  
でも入れないやうにしたのは、實に行  
のです。

ろん正式の剣道をやった人がいたら別だったろうし、何度もやっておれば私の二刀流がいつまでも通用したとは思わないが、最初にやったときは、その意外な棒切れの動きに私の相手はみんな負けたのであった。もちろん重要なのは、私の二刀流でなく、それほど講談本に夢中になったというその体験である。

真田幸村の講談なども、私を夢中にさせた。幸村が考える計略が、一つ一つ淀君にじゃまされるのをくやしき思っ、その個所になるとそのページをゲンコツでなぐりつけたものであつた。そして実際にくやし涙を浮べたものであつた。それほど幸村びいきになつたので、戦争ご

ってほとんど極点に達した。少年講談の宮本武蔵に夢中になって、二刀流の工夫をしたというのは滑稽であるが、武芸者たちの修業に生き生きとした興味を持って実践にいたったことは、今から考えてよかつたのではないかと思う。中学一年のときに勤労奉仕に行つて同級生何人かがとまりこんだ。夕方になると手もちぶさたなので、当時のこととてチャンバラごっこになつた。ところが私の工夫した二刀流は意外な効果があつてみんなに勝つたのである。もち

っこでも、六連銭ろくれんせんの旗じるしも作る、諸大名の定紋じようもんも覚えるということになった。小学生の遊びだけれども、読書体験としてはまことに充実したものであったと思う。そしてその幸村が「日本の孔明こうめい」とよばれていることを知れば、私の読書のつぎの段階が『三国志』になるのは必然というべきものであったろう。幼稚な段階とはいえ、それは確実な進歩であった。

『三国志』には、古来、多くの愛読者がいるが、熱心になり夢中になった度合において、少年のころの私はひとに負けなかったという自信がある。少年向きの『三国志物語』を、はじめから終りまで、これ以上くり返して読むことができないほど読むと、そのあとで吉川英治の『三国志』ということになったのも多くの人と同じであるが、少年向きの『三国志物語』を耽読たんどくしているうちに、私の中に予期しないものが生まれてきていた。それはシナ文学、あるいはシナ文化一般に対する興味である。

そのころ『キング』という雑誌に、折込み付録として『唐詩選』から有名なものを抜いたのが付けられていたことがある。それは大人の雑誌であったが、たまたま見ていたらそれが目についたのであった。それを読んで私は感動したのである。少くとも「わかった」と思ったのである。その付録の最初のもは今でも暗記している。

去国三巴遠

国ヲ去ッテ三巴遠シサンバ